

THE HIDDEN GOD

現代英米文学にみる
神の問題

ヘミングウェイ、フォークナー
イェイツ、エリオット、ウォーレン研究

クリアンス・ブルックス 著
重信千秋・宮里政邦・沼 隆三
斎藤 久・小澤 喬 共訳

リーベル出版

現代英米文学にみる 神の問題

ヘミングウェイ，フォークナー
アイゼイツ，エリオット，ウォーレン研究

イェール大学名誉教授
クリアンス・ブルックス 著

重信千秋・宮里政邦・沼 隆三
斎藤 久・小澤 喬 共訳

リーベル出版

《訳者紹介》

重信千秋 (しげのぶ・ちあき)

1925年生まれ。1956年東京大学文学部英文学科卒業。アメリカ文学専攻。元東京理科大学(理工学部)教授。1984年没。

宮里政邦 (みやさと・まさくに)

1930年生まれ。1962年上智大学大学院西洋文化研究科(アメリカ文学専攻)修士課程修了。東京理科大学(理工学部)教授。

沼 隆三 (ぬま・りゅうぞう)

1938年生まれ。1962年東京大学文学部英文学科卒業。イギリス文学専攻。東京理科大学(理工学部)教授。

斎藤 久 (さいとう・ひさし)

1940年生まれ。1968年中央大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程修了。アメリカ文学専攻。東京理科大学(理工学部)助教授。

小澤 喬 (おざわ・たかし)

1947年生まれ。1973年東京都立大学大学院人文科学研究科英文学専攻修士課程修了。イギリス文学専攻。東京理科大学(理工学部)助教授。

現代英米文学にみる神の問題 定価 2,200 円

1988年5月3日 初版発行

訳者 © 重信千秋 宮里政邦 沼 隆三
斎藤 久 小澤 喬

発行者 串 原 国 穂

印刷所 西 田 整 版 所

製本所 関 山 製 本 社

発行所 リーベル出版(Liber Press)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3

電話 (03)234-1368 振替 東京 6-70627

ISBN 4-947602-79-1 C 3098

*In memoriam patris qui cum libros
me docuit amare tum librum librorum.*

昔私に書中の書を受することを書物を
通じて教えてくれた我が父の思い出に

“...every religion which does not affirm that God is hidden is not true....Vere tu es Deus absconditus.”

Pascal, *Pensées*

…神が隠れた存在であることを明確に説かない宗教はすべて偽りである。…〈まことに汝は隠れています神なり〉

パスカル『パンセ』585

原著はしがき

本書に収録された五回の講演は、一九五五年六月、ハートフォード市のトリニティ・カレッジで開催された大学教授陣の神学会議において私の行なった講演はほそのままである。先年、私はこの中の二番目と五番目の講演を完全に書き改めた。そのため、R・P・ウォーレンに関する講演の中に一九六一年という最近になって公刊された詩や小説についての言及が入ることになった。これはこの講演を書き改めるに当たって、一九五五年に発表されていたものだけに私の論述を限定するのは、意味のないことになると思われるからである。この小著の公刊の準備に当たって、私は概して口語体で叙述し続けようと努めた。ここでの論述は元来講演として考えたものであり、従って本書ではそのような体裁のまま載せている。

私は、実在に対する宗教的見解が正統的でない、あるいはひょっとするとキリスト教的でさええないような作家までも含めたが、これはきわめて慎重に考えた上でのことである。積極的な信者であり、またそのキリスト教徒としての見解が論ずるに足るような作家を、T・S・エリオット

以外に見つけ出すことも難しくはなかったであろう。しかしそうはせずに、私はもっと対象を広げ、たとえ問題をはらんでいても興味深い作家の実例を扱う方が、この講演のものととの相手たる聴衆にとって、より有益であろうと考えた次第である。(こうした作家の実例は時々、問題性をはらんでいる分だけ面白い、ということになる。) しかしながら、たとえ私が扱う五人の作家のうちの誰かの信仰が正統的か否か、あるいはキリスト教徒として必要な最低限の資格を備えているかどうかということまで問題とされるにしても、その人の芸術家としての重要性に関しては如何なる疑いも差し挟むことができない。というのは、これら作家たちはそれぞれ違った文学世代を代表するにせよ、我々二十世紀の英語世界が生んだ最も優れた作家に属するという事實は万人の認めるところだからである。その世界の本質に対する彼らの洞察は必ずやあらゆる読者——キリスト教徒であれ、非キリスト教徒であれ、単なる真理の探究者であれ——にとって重要なものになるはずである。

一九六二年七月

コネティカット州ニュー・ヘイヴンにて

クリアンス・ブルックス

目

次

原著はしがき	重信千秋訳	v
第一章 現代文学の状況	重信千秋・小澤喬共訳	一
——現代文学とキッチュの影響		
第二章 アーネスト・ヘミングウェイ	重信千秋訳	二〇
——モラルへの憧憬		
第三章 ウィリアム・フォークナー	斎藤久訳	三三
——その「善悪観」について		
第四章 W・B・イェイツ	沼隆三訳	四六
——新しき神話の探求		
第五章 T・S・エリオット	小澤喬訳	一三三
——異教徒への説話		

第六章	ロバート・ペン・ウォーレン……………	宮里政邦訳…	一六
-----	--------------------	--------	----

——認識による経験の贖い

第七章	結 語……………	斎藤 久訳…	三六
-----	----------	--------	----

訳者あとがき……………	宮里政邦…	三七
-------------	-------	----

第一章 現代文学の状況

——現代文学とキツチュの影響

1

今日、良識ある一般市民が現代文学を眺めると——仮に現代文学というものに目を向けることがあればの話だが——嘆かわしいことが沢山見つかるのが通例である。『ニューヨーク・タイムズ』のJ・ドナルド・アダムスのような新聞界の権威は、それを見て時々我慢できなくなり、叱責の言を吐いたものである。『タイム』誌が見ると、現代文学にはアメリカ国民の志気形成に必要な要素が重大なほど不足していると判断する。普通のリベラルな知識人が見た場合、確かに、現代文学は幾つか、是認すべき要素を持っていることを認める。例を挙げれば、その誠実さであり、人種差別への攻撃であり、虐げられた貧困階級の人々の間においてさえ、個人の尊厳に対する理解が深まって来ているという事実である。しかしそれと同時に、このリベラルな知識人は、現代の最もすぐれた作家の多くが同情心に欠けており、どうしようもないほどに時代遅れな偏見を抱いているという感想を抱く。すなわち、T・S・エリオットは反啓蒙主義に執着している

し、W・B・イエイツは偉大な詩人であったにしても、ある時期ファシズムと危険な浮氣をした、またウィリアム・フォークナーは、民主活動擁護アメリカ人会 (Americans for Democratic Action) 入会の資格をついぞ得られなかったではないかと。しかしキリスト教を信じている人が現代文学を眺めた場合、そこに、励まされ、希望を抱かせる材料を沢山見出すはずである。

我々が生んだ現代文学それ自体が一つの偉大な成果である——しかも最悪の条件の下で達成された成果であるため、ますます現代文学は勝利に意気揚々としている。そしてまた、そのことによって、現代文学が實際上活力に富んでいるということが証明されている。私はどちらかと言えば現状を肯定的に評価しようとするが、それには幾つかの留保条件および理由説明が必要になってくる。

まず第一に私は、機械的に生産される現代大衆芸術と純粹な芸術家の作品とを注意深く区別するということである。工業文明は、自らがつくり出した余暇を埋めるための娯楽を、大量に生産し始めた。そして冷蔵庫や自動車の大量生産なら大いに歓迎されて然るべきだが、芸術のそれについては弁護すべき理由がほとんど無い。真の芸術家は恐らく我々の前に人生の何らかのヴィジョンを提示しようとするであろう——すなわち彼の想像力により感得した人生像であり、彼はそれを示して見せることによって読者の想像力が魅了されることを望む。彼は人間的状況 (human situation) に関する彼独自の直観、言い換えれば彼独自の洞察を我々に伝えようとする。それはもしかすると取るに足らぬ洞察かもしれない。それは些細な見解かもしれない。しかし、少なく

ともそれは芸術家が信念に基いて探究した結果の洞察であり、我々読者のために具体的表現の形式で言い表わすことにより検証を行なおうとした洞察なのである。

しかしながら、これと根本的に異なる前提から出発するのは、大量生産方式に基づき、プレハブ式 (prefabricated) に娯楽を生産して行くような作り手の場合である。そのような作り手は、全く何も与えないし、また与えようという意図もない。彼が望むのは、彼が対象にしている読者の心に予め存在している月並みな感情、お決まりの情緒的傾向を巧みに利用することである。彼は程よい刺激を与えて、このような感情や情緒的傾向を満足させてあげ、それによって読者や聴取者の心に、何か真新しいことでも経験したかのような錯覚を抱かせるのだ。だが実際には彼らの方でも、このつくり手は、受けること間違いなしの紋切り型 (ステロタイプ) に頼るだけで、それ以上の域に抜け出ていないと確認するのである。

このような現状を考慮に入れると、この類の芸術が暇つぶしか苦痛を和らげてくれるもの、または、軽い麻薬剤よりましなものになるとはとても期待できない。しかし麻薬は決して滋養物になり得ないし、常用すれば人間の理解能力を麻痺させ鈍化させかねない。私は想像力の減退が現に起こっていると確信している。ウィリアム・ワーズワスは一八〇〇年、比較的扇情的な大衆芸術によって想像力が現在窒息させられていると主張した。しかし私が思うに、当時ワーズワスのこうした状況分析を深刻に受けとめた人はほとんどいなかったし、また今日でもほとんどいない。私は現在の状況を非常に深刻に受けとめる。私は十九世紀文学には深い傷跡が刻まれている

と思う。この傷跡は正にワーズワスの指摘した様々な力がつくり出したものに他ならない。いずれにせよ、今日、大衆芸術が安っぽい小説、ティン・パン・アレイ⁽¹⁾、映画、ラジオ、そして最近のテレビを通して及ぼしてくる圧力と比べれば、一八〇〇年にワーズワスが直面した問題はきわめて穏やかなものに見えてくるということは確かである。

私はこの安っぽい芸術、キッチュ (Kitsch)⁽²⁾ が絶えず強力な影響を及ぼしながら流して来る害毒について、これ以上敷衍するつもりはない。しかし現代文学について論じる場合、私は自分がこのまがい芸術のことを無視してはいないということを、ことわっておかなければならないと思う。結局のところ我々市民の大半にとっては、これこそが存在する唯一の現代文学に他ならないからである。更にまた、我々の最も優れた文学と大衆文学との間に存在するこの大きな隔りこそ現在の文化的状況を示す最も重要な現象の一つだということである。従って如何なる人であろうと、いつの時代にも偉大な芸術と並行して、常に見掛け倒しの芸術が存在したと言って異議を唱えることはできない。なるほどその主張は正しい。過去よりこの方、常に丘があれば谷が存在したし、山岳地帯があれば平野が存在してきた。しかし目下の状況は、聳え立つアンデスの峰々がわずかに数マイルの距離を隔てて南太平洋アタカマ海溝の深淵と並んでいる光景にたとえられる。そしてこの地質学的比喩を、もうちょっと続けさせていただくと、これほどまでにきびすを接して、高峰と深淵が相並んでいる状態は常に非常に危険な不均衡を暗示するものである。つまりこれは圧力 (応力) とひずみのパターンであり、やがて起こる地震と地殻の激しいけいれんを予告

するものである。

最後に最も重要なことだが、私が、現代大衆芸術があらゆる方面に広がる力を持っていることに注意を喚起した理由は、我々に備わった我々の時代の真正銘の文学を見分ける力、およびそれに対し反応応答する力にまでそれが悪影響を及ぼしてくるということである。我々がウィリアム・フォークナーのような作家とテネシー・ウィリアムズのような作家を混同してしまう⁽³⁾というのは、そのいずれもがセックスと暴力を強調しているということのためではないだろうか。我々がロバート・ペン・ウォレンの小説とフランク・ヤビー⁽⁴⁾ないし、キーズ夫人⁽⁵⁾の小説の真の違いが理解できないのは、これらが共通して歴史小説であるということのためではなからうか。あるいはまた、キッチュに大層慣れ親しんでしまったので、我々は芸術が本来如何なるものかを忘れてしまっている。そのために我々は、大衆芸術が好ましくないという真の理由はただ一つ、それに真面目な思想(メッセージ)が欠けていることであると結論づける。そうした上で我々は、我々の真面目な作家にこう要求するのである。これからあなた方真面目な作家は作品に真面目な思想を盛るようにしてほしい、そして、あなた方は通りすがりの読者に向かって、真面目である旨謳ったラベルを表示した上で、あなた方の目ざすその思想を売り込んでほしいのだ、と。すなわち、我々は詩学と詩の修辞学を混同する傾向がある。言い換えれば、我々は文学が純然たる意志の所産であるかのように論じ、決して想像力の結果だとみなさない。だから現代の神話におけるミューズ(詩の女神)は予期せぬ折に慈悲深くも親切行為を施してくれる一人のわがままで気

まぐれな女神ではなく、非常に精力的に仕事を行なう広告事務所で働く例の女性——時々気のきく利発な提案をし、割り当てられた一定の仕事は、必らず仕上げるということで、周囲から信頼を寄せられている——あの手際の良い有能なリーライト・ガール「原稿の修正書き直しを担当する係」となっているのである。

新聞界の權威の或る面々が現代詩人を強情な反啓蒙主義者とみなし、始終叱っているのは正に以上の理由からである。国家の現在のありようを見て不安に駆られた大学教授や編集者の中に、アメリカ人の志気を昂揚するような小説の生産を真剣に希求する人々がいるのはこのためである。偏見にとらわれない比較的賢明な批評家を含め、きわめて多数の人々が、いわゆるアファーマティヴ文学 (affirmative literature) 「はっきりものごととはこうであると主張する文学」への要求を執拗に繰り返している。このアファーマティヴという語がもっている唯一正当な意味からすれば、優れた文学はどれもこれも「はっきりものごとを主張」しているものである。ところがこの手の人々はそうではないかと思っているかのようである。私の知る限り、真の意味でネガティヴ文学 (negative literature) 「明確な主張を持たない文学」は悪しき文学ないしは欠陥のある文学である。更に推測するに、私はこのような文学を声高に要求するこの手の人々が心底から満足する文学とは、結局のところ、或る法案を可決させるために、あるいは特定の政党を選んでもらうために、一席ぶつような文学のことに他ならないのでは、と考える。

いずれにしても、現代の真摯な作家たちが達成した成果を評価しようとする時、人が求めるの

7 第一章 現代文学の状況

は、こうした文学とは別のものである。それは一篇の政治的小冊子ではなく、もっと内面的なものであり、特定の悪弊に対する長口舌ではなく、もっと深く広く響き渡るものである。人は、ますます非人間化する世界の中で、一人の人間としての自己を実現しようとする。言い換えれば、単なる物のように漂うのではなく、責任ある道德的存在として振る舞おうと思う。こう思いながら人は人間の典型像を捜し求めるのである。

これまでに私が述べてきた事柄は、当然のことながら全部キリスト教文学と密接に関連している。今日、キリスト教徒の立場を明確にするとともに、それに深く身をゆだねた生き方をする多くの才能ある作家がいる。しかし、その反面、キリスト教徒読者に最も重要な意味をもつ現代文学の中には、いかなる宗派の信者にもならず、自らを不可知論者ないし無神論者と率直に認めている作家たちによって書かれたものも存在するのである。もし我々が現代の真面目な文学に公然とキリスト教を説くよう求めるなら、我々は精神にとって、最大の糧になるような現代文学の或る部分までも確実に除外することになるであらう。だが私はもっと先までこの警告を推し進めよう。もしも、T・S・エリオットやW・H・オーデン⁽⁶⁾のようなキリスト教徒作家の作品がはつきりした形で説教を行なっているというだけでこれを読むのだとすると、我々は恐らく、キリスト教徒芸術家としての彼らの意義をつかみ損ねてしまうであらう。と言うのは、もし彼らの技巧の意味を我々が理解できないとすれば、我々は彼らの作品を重要ならしめている要素も見失ってしまうことになるからである。そうなったら、彼らはジャーナリストか、あるいはパンフレット